

平成27年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT27294 未来の地域を拓く君たちへ。島嶼地域における支え合う文化の「宝」をさがそう！



開催日：平成27年8月9日(日)

実施機関：鹿児島国際大学

(実施場所) (鹿児島県奄美市 AiAi ひろば(観光交流センター))

実代表者：田畑 洋一

(所属・職名) (福祉社会学部・教授)

受講生：高校生16名

関連URL:

【実施内容】

受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

①講義：「地域の文化的特性と地域づくり」

これまでの科研費補助金研究の経過 [「離島の離島における高齢者の自立生活と地域の役割に関する研究」(2003～2005年度)、「琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究」(2011～2013年度)、「琉球弧型互助形成にみる島嶼防災と地域再生実践モデルの開発評価に関する研究」(2014～2016年度)] をパワーポイントで写真を挿入しながら、高校生に分かりやすく報告することで、研究体験「地域の『宝』をさがして整理してみよう！」につなげるようにした。

②講和：「奄美における地域づくりの実践報告」

大和村のんティダの会世話役の重野弘乃さんが「住民による助け合いのご近所福祉」と題して、続いて大和村役場保健福祉課の田中あさみさんが「住民の底力なぜ、支え合いが必要なのか」と題して、写真を挿入しながら報告したが、このような実践活動を見聞することで、受講生がスムーズに研修に取り組めるよう、プログラムの組み立てに留意、工夫した。

③KJ法による研究体験：「地域の『宝』をさがして整理してみよう！」

演習に入る前に、KJ法等について20分ほどわかりやすく説明し、スムーズにグループワーク演習に移行できるように工夫した。

④ミニ学会：「ひらめき地域づくり学会」(ポスターセッション)

各グループで思いついた事柄をポスターに貼付し、これら地域の「宝」を活かした「地域づくりをどのようにするか」について、グループ毎の代表が発表し、学会の雰囲気を経験でき、進路にも活かせるよう留意、工夫した。

当日のスケジュール

- 09:40- 9:50 開講式
- 10:00-10:30 講義「地域の文化的特性と地域づくり」
- 10:40-11:20 講話「奄美における地域づくりの実践報告」
- 11:30-12:30 地域の「宝」をさがして整理してみよう！
- 12:30-13:20 昼食
- 13:20-14:30 地域の「宝」をポスターにまとめてみよう！
- 14:30-15:00 クッキータイム(研究者・島内の専門家・事務担当者と一緒に懇談)
- 15:00-15:50 ミニ学会「ひらめき地域づくり学会」(ポスターセッション)
- 15:50-16:30 修了式(未来博士号授与・記念撮影)
- 16:30 終了・解散

実施の様子(図、写真等を用いてわかりやすく記入してください)



開講式 (実施代表者挨拶・オリエンテーション後、学術振興会の岩田研究員による科研費の説明)

◇離島の離島である鹿児島県の瀬戸内町と、沖縄県の竹富町について、科研費の研究成果による差異を学ぶことにより、これからの奄美の展望等に関する道標をみたような表情で聞き入っていた。

◇高齢化率58.3%の集落の取り組みを聞くことで、与えられた活動ではなく、自ら関わる活動の大切さに気付いたようである。

◇赤ちゃんから高齢者までを対象とする保健福祉課の仕事内容について具体的に視聴することで、高校生の自分に何ができるのだろうかという事を真摯に考える機会になったようである。



(講義「地域の文化的特性と地域づくり」)

(2名の講師による講話「奄美における地域づくりの実践報告」)

◇5人1組のグループを2組と6人1組のグループにわかれ、各組自己紹介した後、司会者、書記、発表者を決め、演習を開始した。「奄美大島が住みやすい地域になるためにはどうすればよいか」というテーマに対し、1人5枚渡された幅広の付箋紙に、「高校生の目から見たシマの宝を活かした地域づくりについて」の案を書き込み、似通った案をグループ化し、タイトルを付ける作業に取り組んだ。小グループから中グループへそして最後に全体を一つの文言にまとめる作業を終えたところで、クッキータイムに入った。

◇クッキータイムではKJ法について、「難しかったけれど楽しかった」、「社会科?の授業でやった気がする」等の意見や、受験等についても意見等々が出てにぎやかだった。

◇ミニ学会では、作成したポスターを壁に貼りつけ、各グループの発表者が演習過程や結果について報告をした。

◇同じテーマに対し、結果が異なることの意味と楽しさについて理解できたと思われる。

◇未来博士号授与では、全員緊張した面持ちであった。



(グループディスカッション)

(ポスターの作成)

(ポスターセッション)



(未来博士号授与)



(参加者全員で)

事務局との協力体制

◇研究教育開発センターが、委託費の管理と支出報告書の作成、日本学術振興会への連絡調整、提出書類の確認及び本事業の受付、保険加入手続き等を担当し、多岐にわたる事務についての協力体制ができている。また、研究教育開発センター、総合企画室広報係及び入試室が、マスコミ・高校等を通じた本事業のPR、ポスター等掲示の手配、大学HP等の媒体での広報なども行った。さらに実施代表者および分担者と連携して、実施場所近隣の高校・教育委員会等に呼びかけを行い、本事業をPRし、参加者確保に大きな寄与があった。

広報活動

◇実施代表者・分担者および研究教育開発センターが、地元の高校・教育委員会等に書面で本事業のPRや、総合企画室広報係及び入試室と連携し、大学のHP等に募集案内を載せた。また、機関の各種説明会等でも資料配布を行い、地元の高校（奄美大島と周辺の離島）にポスター・チラシを郵送した。また、オープンキャンパス参加者への広報、地元新聞(南日本新聞・奄美新聞・南海日日新聞)に広報依頼を行い掲載してもらった。

安全配慮

◇事前に実施代表者が参加者全員に安全講習を行い、事業の安全確保のために、受講生5～6人に1人の割合で実施協力者を配置した。

◇夏季開催のため、エアコンのある部屋で実施し、休憩時間以外も水分補給できるよう配慮した。

◇受講生の当日の傷害保険は、研究教育開発センターを通じて保険会社に参加し、事務担当者がその管理を徹底した。なお、実施者には大学が加入している保険を適用した。

今後の発展性、課題

◇本プログラムは、離島の高校生を対象に初めて開催されたものである。初回であり、高等教育機関のない地域での実施であったため、事前のプログラムの趣旨説明と広報を十分に行うことができず、予定の定員30名には届かなかった。しかし、本土を含む3校から16名の参加者があり、いずれの参加者も熱心に取り組んでくれた。この学びの意義は十分に満たされたと思うし、各自の今後の研究へのヒントを付与できたと考えている。本プログラムの趣旨が浸透すれば、遠隔の離島であっても定員の充足は可能と思う。

◇こうした学びは、離島の高校生にとっては新鮮に受け止められ、主体的に真面目に対応してくれた。身近な地域の問題を考え、伝統文化の「結い」を宝として受け止め、それに根付いた地域づくりの必要性が確認できたと思う。この点は地元の新聞三紙にも紹介されている。

◇なお、関連して、平成26年12月、これまでの科研費調査活動を通じて連携協力関係にあった、地域づくりで先進的取り組みをしている鹿児島県奄美大島の大和村と鹿児島国際大学の地域協定の提携が結ばれた。そのため、現地の協力体制も強化されており、本プログラムは地元の協力により円滑に実施することができた。

【実施分担者】

田中 安平 福祉社会学部・教授

小窪 輝吉 福祉社会学部・教授

【実施協力者】 7 名

【事務担当者】

吉野 裕 研究教育開発センター・書記